

金山・落合診療所の中村義博所長がこのほど「キタキツネのキキ」という物語を創作されました。

中村先生は、毎日通勤のためかなやま湖畔を通ると、通りがかりの車に餌をねだるキツネをよく見かけたことから、「車にひかれてしまう」と心配していた矢先に一匹の子ギツネが死んでいるのを見つけました。親ギツネがその子ギツネをしきりに舐めている姿がとても哀れでした。キツネが道路に出てくるようになったのは、誰か通りがかりの人から餌をもらい味をしめたからで、餌を与えるという何気ない行為が実は彼らを不幸にしていることを知り、この物語を書き始められました。今月号から連載で紹介します。



作者の紹介

中村 義博
(なかむら よしひろ)

川崎医科大学を卒業後、同附属病院で救急医、大阪府立病院で麻酔科医、静岡県 の聖隷三方原病院で救急医を勤めた後、長野県の奈川村国保直営診療所、門別町立国保病院で地域医療に従事され、平成16年8月から落合診療所と金山診療所の所長として勤務されています。

キタキツネのキキ

1

作 なかむら よしひろ

キタキツネのキキが生まれたのは広い北海道のまん中にある小さな湖のほとりでした。湖のほとりと言ってもキキのおうちは湖のそばを通る道路の側溝の中でした。なぜ側溝がおうちなのかですって？

それは今年の3月の末のことです。長い冬がようやく終わろうとして、少し春らしい日の光がさし始めた日のことでした。キキのお父さんがお腹の大きいお母さんを散歩にさそいました。冬の間ずっと巣穴にうずくまっていたことの多かつたお母さんに外の新鮮な空気を吸わせてあげようと思ったのです。

お母さんは子どもが生まれるまでもう少し時間があったので、お父さんと一緒に出かけるところにしました。3月といっても外にはまだたつぷりと雪が残っていました。お母さんはお父さんの歩いた後をゆっくりとついて行きました。久しぶりの外の空気はとてもいいにおいがありました。

雪のにおいに混じって、かすかに新しい葉っぱのにおいがします。やがて2匹は湖沿いの道路まで降りて来ました。

道路の雪はすっかりとけコンクリートの地面が出ていました。まずお父さんが道路を渡りクマザサのかげに入りました。続いてお母さんが渡ろうと道路に出たときです。いきなり右側のカーブから車が飛び出してきたのです。車はキーっという大きな音をたてて止まりました。お母さんはぎりぎりのところでなんとかひかれますが、おどろいて道路わきの側溝に飛び込みました。心臓がドキドキ音を立てているのが自分でもわかりました。側溝の中に身をひそめていると車から若い男の人と女の人が降りてきました。男の人が車の下をのぞき込むのを見て女の人が

「ねえ、ひいちゃったの」と言っています。

「いや、大丈夫。やはり野生の動物だね、すばしいや」「こう言うと、2人は何事もなかったように車に乗り込んで行ってしまいました。

お母さんは車が行ってからも心臓がドキドキして動くことができませんでした。じつとうずくまっていたと側溝の外で何か音がします。それはお父さんでした。お母さんを探し、おいをたどって側溝まで来たので

す。

「お前、けがはしなかったかい」

「ええ、だいじょうぶ。でもこわかったわ」

「そつだろつ、じゃあ今日はもう、うちに帰ろうか」

「ええ、そうするわ。でも、もう少し待って。まだドキドキしているから」

そうこたえたものの、お母さんはお腹が痛くなってきたのです。しばらくしたら落ちつくかと思つたのですが、よくなるどころかますます強くなってきました。ちよつと痛みがひいたかと思うとその次にはさつきよりも強くなり、思わず「痛い」と声をたてました。

お父さんがおどろいて

「お前、やっぱりどこかにけがをしたんじゃないのかい」と聞きました。

「いいえ、違うの。赤ちゃんが生まれるみたい」

お父さんはあわてて、

「生まれるたって、こんなところで生んじや育てられないよ、なんとかうちまで歩けないかい」

「無理みたい、ここで生むしかないわ」

こうして生まれたのがキキと妹の二匹でした。普通キタキツネの子どもは一度に4、5匹生まれるのですがキキたちは珍しく2匹だけでした。

(10月号へつづく)